

日本経済新聞

がんにも県民性 死亡率、罹患する部位に地域の特徴



日本は男性の3人に2人、女性の2人に1人ががんに罹患（りかん）する、世界トップクラスのがん大国です。実はがんには地域間格差が存在します。

国立がん研究センターの2023年のデータベースによると、がんによる全年齢の死亡率が47都道府県で最も高いのが青森県で、18年連続で1位です。2位以降は北海道、秋田、岩手、福岡が続きます。

がん死亡率（全年齢、以下同）が最も低いのは長野県で、こちら最も長く定位置にいます。2番目に低いのが滋賀県で、3位以降は山梨、奈良、福井の順です。

東京はがん死亡率が17位、大阪は同34位です。人口10万人あたりの死亡数を単純に比べると、青森が東京より高くなるのは当然です。がんは一種の老化であり、高齢者が多い地方ほどがんによる死亡が多いためです。したがって、がんの地域差は人口構成を考慮した「年齢調整死亡率」で比べる必要があります。

青森県の年齢調整がん死亡率は人口10万対134人で、長野の同92人の約1.5倍です。青森県は喫煙や多量飲酒が多く、運動不足や肥満といった生活習慣上の課題も指摘されています。

長野県は野菜菜などの漬物をよく食べる、塩分摂取量の多い地域です。それでもがんが減った理由の一つが、全世代向けのがん教育です。教育県としても知られる長野は、人口10万人当たりの保健師数が全国で最多の県です。がんは「知ることによって克服できる病気」と痛感します。

がんの地域性は部位別の罹患傾向にもみられます。

秋田県は胃がんの年齢調整死亡率が最も高い県です。胃がんの原因のほとんどはピロリ菌の感染ですが、塩分の過剰摂取が重なると胃がんリスクがさらに高くなります。ピロリ菌の感染に地域差はほとんどありませんが、秋田県は塩分摂取量が多いため、胃がん死亡率が男女ともトップです。

肝臓がんは九州地方に多いがんです。佐賀県は肝臓がんの主要な原因となるC型肝炎ウイルス（HCV）の感染率が最も高く、肝臓がんによる死亡率も全国トップです。HCVは佐賀県を含む東シナ海エリアの「風土病」だからです。同様に、母乳から感染するウイルスが原因で発症する「成人T細胞白血病」が多い九州・沖縄地方は、白血病の罹患率が高いことで知られています。

乳がんの罹患率が最も高いのは東京都です。乳がんは女性ホルモンの影響が大きく、妊娠や授乳で月経が止まると女性ホルモンの刺激が減り、乳がんの罹患リスクが下がります。東京の高い罹患率の背景には、出生率の低さがあります。

がんにも県民性があるのです。

2025年11月5日